

演出された危機の本質を知れば あらゆる相場が見えてくる

— 2012年、恐慌の“陰の極” (上) —

常葉学園大学教授、評論家 副島隆彦 (そえじま たかひこ)

・ 中国ではバブル崩壊の心配はない

金融市場では、世界的に資金が株式のようなリスク資産から債券のような安全資産にシフトしている。外国為替市場では、超低金利の円資金やドル資金を調達し、高金利通貨やリスク資産に投資したキャリー取引への巻き戻しが進んでいる。特に欧州ではギリシャでの混乱に見られるように、他の南欧諸国も含めて信用不安が高まっていることから、株価の急落と並行してユーロ安もかなりの勢いで進んでいる。

欧州では既にバブルが崩壊して危機に見舞われている一方で、中国の沿海部でもバブルが膨れ上がっており、それが破裂することで危機的な状況をもたらされることが懸念されている。

まず中国の動向を概観していく。同国では 2010 年 5 月 1 日から上海万博が開催されており、これが 10 月 31 日で終了すると景気が崩れるといった悲観的な見方が聞かれる。

高度成長期の日本でも神武景気や岩戸景気、「いざなぎ景気」の合間に景気後退が見られたように、循環的な要因から景気が一時的に落ち込む場面は当然出てくるだろう。また、米欧で金融危機が起これば、当然のことながらある程度は影響を受けざるを得ないはずだ。しかし、それはあくまでも高度成長が一服する程度のものに過ぎず、中国でバブルが崩壊し、構造的に深刻な状態に陥ることは考えにくい。

唯一危ないのは、中国版キャッシュカードである「銀聯カード」であり、「チャイニーズ・エクスプレス・カード」と呼ばれているものだ。これは本来、消費をする際に銀行の口座から自動的に引き落とされるデビットカード(借記カード)であり、ローンを受けられるクレジットカードと呼ばれるクレジットカードではない。

先進国とは異なり、中国では個人に対する信用力がないためにクレジットカードが流通していないことから、デビットカードと混同されることが多いようだ。このカードの決済ができなくなる恐れがあるといったことがいわれているが、実際にはそれほど危険な状態ではなく、単に噂に過ぎないといえよう。